
ロクンローライフ

桶乃弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロケンローライフ

【Nコード】

N1665W

【作者名】

桶乃弥

【あらすじ】

この物語はある無名のギター少年が、バンドの解散、結成、ソロデビュー、時に色恋にロックし、時に裏切られ、時に友情を育み、紆余曲折の音楽生活の中で、夢の舞台である武道館でのライブを目指し突き進む、ロケンローな物語である。

- 1 - 解散じゃボケエ！

それは、俺がまだギター少年だった二十歳の頃に遡る。高校の時に組んだ俺たちのバンドが、結成わずか二年とちょっとで消滅したあの日に……。

寂れた片田舎のライブハウスから客が一人、また一人と店をあとにする。それは何年振りだろうか、白い雪がチラつくホワイトクリスマスだった。こんなちよつとしたロマンチックなクリスマスイヴの夜だというのに、似つかわしくない大きな怒号がその楽屋から響き渡ったんだ。

「ふざけんな！ ボケエ！」

その大声の主は、俺たちのバンド『ローリング・クレイドル』のボーカルを演^やっていたケイン。顔立ちはその名の通りハーフでイケメン。ただ、興奮するとガキの頃暮らしていた名残から、ド関西弁がぶつ飛ぶツワモノだ。

「なんじゃ、お前ら！ どいつもこいつもムチャクチャなステージ演^やりやがって！」

ケインが顔を真っ赤にして怒鳴りあげる。どうやらかなりご立腹のようだ。もつとも、顔が真っ赤なのはステージ後に楽屋でヤケ飲みしたビールの影響も多少あるようだが、今日のヤツの怒りっぷりは、いつもとはちよつと違っていた。

「デル！ なんじゃあのギターはっ！ 勝手にダラダラとソロなん

か演りやがって！」

矛先がギターを担当している俺、通称『デル』に向けられた。俺がステージで気持ちよくなれば、大体、毎回、ソロが長くなるのは今に始まったことじゃない。でも、どうやら今日のケインには、それが政治家の国会答弁のようにウザかったようだ。

「チツ、うるせーな。もうそれくらいでいいだろ！」

ケインに楯突いたのはドラム担当の通称『マッチョ』。マッチョと言っても別に体格がゴツイわけではなく、プロレスラーの藤波辰巳をリスペクトしているかららしい。何故『ドラゴン』をチョイスしなかったのか、その理由は誰も知らない。

「なんじゃ！ オラ！ 文句あんなやったら言ってみんかい！」

火に油だった。ぶっちゃけると俺からみても、この日マッチョがケインに物申せられる立場では無かったのだ。実はドラマーの命であるドラムスティックを、ここに来るまでの電車の中に忘れてきたという大失態を冒していたからだ。幸い、ライヴハウスの備品を借りて事なきを得たが……。ケインがマッチョに食って掛かる。

「電車にスティック棄てるような奴に音楽のナニを問えるんじゃない！ オラ！ なんか言うてみい！ オンドレメンドレ！」

ケインの関西弁がますます酷くなっていく。こうなると本場の関西人でさえ、『そんな関西弁使うか！』と、許容範囲を超えるガラの悪さに到達するのも時間の問題だ。ケインによれば『中途半端に関西で暮らした人間に表れる特有のクセ』らしいが……。はて、本当だろうか。

「クソッ、あー、胸糞悪いっちゅーねん！」

ケインは悪態をつくだけついていきなり楽屋を飛び出して行っただけ。一度爆発したケインを止められるヤツはメンバーに居ない。俺たちはケインの居ない楽屋に少しホッとした。

普段は真面目で温厚なケインが、こんなにも感情をむき出しにするにはそれなりに理由もある。今日ヤツは最近付き合い出した彼女とデートの約束をしていたらしい。だが、なかなか借りの事の出来ないイヴのステージを、キャンセル待ちで運よく確保出来たこともあって、ケインは泣く泣くこのクリスマスイヴのデートを取りやめた。

だが、そんな思いをしてまで挑んだライブにも関わらず、自分で言うのも難だが、俺たちのステージは酷かった。バンドっていうモノは、メンバー同士のちよつとした意志の擦れ違いで、音が百八十度変わることもある。演じている俺がその不協和音に気づく訳だから、当然客はもっと敏感に察知するだろう。そして、ケインもそれに気づいていた。

スティックを忘れたドラム。バイトがあるからとドタキャンしたベース。サポートメンバーの代役でやって来た、演奏歴たった一週間の素人キーボード。そして、自己中全開でギターをかき鳴らした俺。ケインはそんな演奏に嫌気がさしたのか、歌詞なんてそっこのけで序盤から執拗にシャウトを繰り返す。

結局、怒ったケインがセトリリストの中盤でさっさと楽屋に引き上げてしまい、持ち時間を大きく持て余したまま楽器メンバーだけ取り残されたステージ。仕方なくそれっぽいジャムを十分間程度披

露してステージを無理やり終わらせた。まあ、俺から見ても本当に酷いステージだった。よく客が『金返せ』と言わなかったもんだ。

……いや、まあ俺たち素人バンドのライブなんて聴いている客は殆ど居なかったたつてのがオチだけど。そういや今日だつて来ている客と言えば、例えるなら閑古鳥鳴いている川崎球場のスタンドで、試合そっちのけでちちくりあっているカップルみたいな客が数組だつたっけ。

と、楽屋のドアがドーンという衝撃音と共に勢いよく開く。

「なんやねん！ クソッ！」

ケインが携帯電話片手にブルブル震え楽屋に舞い戻ってきた。どうやら自分なりに頭を冷やして冷静になろうと外の空気を吸いに出たものの、外は何ともロマンチックなホワイトクリスマスだったという事実気づき、おまけに極寒の中電話をかけても彼女と連絡がつかなかったらしく、さらにご機嫌が斜めになったようだ。

「もうええ、あーもうやってられるか！ こんなバンド今日でもう解散じゃボケエ！」

唐突に飛び出した解散宣言。いや、本当は誰かがそのうち口に出すんだろうなと感じていたその言葉だった。ただ、それがケインから発せられるとは思わなかった。アイツはこのバンドに結構魂を注ぎ込んでいた。

「もうお前らとは会わんからな！ 絶交じゃ！ クソがつ！」

とにかく文章にするのも滅入るほどの罵詈雑言を発してケインは

楽屋から姿を消した。

「それじゃあ……、僕これで失礼しまーす」

サポートメンバーの代役だった……。あれ、名前なんだっけ？とにかくキーボードがノソノソと引き上げていく。サポートのサポートってどんだけ層が厚いんだウチのバンドは。いや、層が厚いんじゃない。肝心の層が薄いんだ。ミルフィューなら約三層程度。フォークを入れればすぐに皿に当たる。

「さて、俺も帰るわ」

ドラムのマッチョもバツが悪そうな顔をして立ち上がると、俺も同じようにギターケースを手に立ち上がった。店の外に出るまで二人とも何も話そうとはしなかった。ケインのことも、今後のことも。

「じゃあ、またメールするわ」

「ああ、お疲れ」

俺たちは店の前で別れた。この時、バンド『ローリング・クレイドル』は解散した。俺たちのオリジナルで、毎回ライブでは必ず最後に演奏した『ダッシュ』。それを最後のこの日に披露することも無く。

この日の為に新調した黒のジャケットが、雪に埋もれて白く染まっっていく。人もまばらな駅前では、この寒空の中居酒屋の店員が呼び込みしている。

「こんばんは！ 今日クリスマスなんでビール一杯百円です！

どうですか!」

「……。マ、マジっすか？」

「ハイッ! マジっすよ!」

こんな夜は独り酒もいかな。店員の兄ちゃんの威勢に押されるまま、俺は煌々と照らされた赤ちようちんの世界へと吸い込まれていったのだった。

- 2 - 表現者とは

その日は、悪いことって続くもんだなと思い知らされた。バンド解散の翌日、俺は二日酔いの頭をフラフラさせながら、バイト先の音楽スタジオで受付の仕事をしていた。

「おはようございまーす」

「あ、おはようございます。今日は早いスね」

「うん。ああそうだ、悪いけどシールド貸して欲しいんだけど」

「はい、ちょっと待って下さいね……」

スタジオには色んなジャンルのミュージシャンの卵が訪れては、皆が思い思いに自分の演奏に磨きをかけたり、音楽を嗜んだりしている。この四十代の男性も昔からウチの店を贔屓にしてくれている。ちよつと紳士な感じのキーボード奏者だ。平日だが年の瀬の冬休みとあって、いつもは土日しかやってこない学生や会社員の会員もチラホラ。その殆どの客は顔なじみだった。

「お待たせしました。どぞ」

「ありがとう。今日何時間の予約だったっけ？」

「うーんと、二時間……スね」

「了解、ひよつとしたら延長するかも。大丈夫？」

「あー、今日は立て込んで無理っすねえ」

「そう、じゃあ仕方ないか」

「すみません」

「いやいや、じゃあお借りするよ」

「はい。どうぞー」

この町に数少ないスタジオは、俺にとっても絶好の練習の場だった。高校の頃にバンドを結成して以来、ちよくちよく借りていたこのスタジオで、たまたま見かけたバイト募集の張り紙。俺は高校卒業と同時に進学せず、ここで毎日アルバイトを続けていた。

「おはようございます。Bスタ空いてますか？」

「やあ、おはよう。あれ？ 今日予約入れてたっけ」

「いえ、空いてたらラッキーになって」

「うーん、埋まっちゃってるよ」

やって来たのは女子高生の小川理恵^{おがわりえ}。ガールズバンド『スイート・ツイト』のギター兼ヴォーカル。土日は決まってウチで練習していく彼女たちだけど、ここの所毎日のように彼女だけ店に訪れていた。

「そうですかー。じゃ、またそこで雑誌読ませて貰ってて良いですか？」

「うん、いいけど。今日は多分キャンセル出ないかもよ」

「いいんです。このロビーの雰囲気とか結構落ち着くんで」

「あ、そう。ま、別にこっちの事は気にしないでいいからごゆっくり。空いたらまた声かけるよ」

「はい！」

スタジオと言っても片田舎の小さな店。雑然としたロビーの傍らに設けた待合用の椅子にその娘はちょこんと座ると、袖のマガジンスタンドから雑誌を手に取りパラパラとページをめくる。ココんところこうして暫く雑誌を読んだり、俺のバンドについて聞いてきたりして、小一時間すると帰っていく。ショートボブの髪型が良く似合う女の子だった。

別に詮索するつもりはないけど、練習が出来ないなら友達と遊びに行ったり、ショッピングしたりとか、女子高生なら幾らでも時間を過ごす方法があるはずなのに、こんなむさ苦しい小さなスタジオのロビーで、缶ジュース飲みながら折れ曲がってボロ付いた雑誌を読んで……。まして客の入れ替わる時間以外は殆ど俺と二人つきり……。

「あれ？ ひょっとして、これって恋愛フラグ立った？」

なーんて、ちょっとはそう思っても不思議じゃないくらい、練習は他のバンドメンバーとやって来た時くらいだった。まあ、理恵ちゃんも一応ギターは持ってきているけど……。俺に会うためのカムフラージュ？

「あ、何ですかこれ？」

理恵ちゃんが店の壁に張っていた『出てこいや音楽祭』のポスターを指さし尋ねてきた。

「え？ ああ、来年の夏に野外イベントがあつて、その新人オーディションの告知」

「へえー」

「応募してみたら？」

「そんな全然！ ウチらのバンドなんてまだまだですよ」

「んなの気にするなつて。表現者つてさ、人に聴いて貰つて、観て貰つて、初めて成り立つもんだぜ。音楽だろうと、作家だろうと、スポーツだつて関係ないよ。他人と比べたり、自分の音を卑下したり、逃げ出したりする前に、出来ることをガンガンぶつけてやんなきゃ！」

「……。そうですよね」

「そうだつて！」

「何か自信が湧いてきました！」

「そうそう、未来なんて余計な事考えずに、いっちゃえ、やっちゃえ！」

「あはは」

めっちゃ瞳をキラキラさせて俺を見る理恵ちゃん。ヤバイ、惚れた。可愛い。決まった。彼女居ない歴三年。そろそろ恋愛にも目を向けないとな。ここで一気にデートの約束だ。

「じゃあ、デルさんのバンドも一緒に応募しましょうよ」

「え？」

一気に現実を突き付けられた。そうだった。俺の生活の一部であり、今は見えなくても、きっとその先に光り射している未来へと二年前に出航した船。希望と野心と情熱に満ち溢れ乗り込んだ俺たちのその船は、昨日あっけなく沈没したばかりだったんだ。気づけば俺は目標となる灯台を見失っていた。

- 3 - Your Fire

俺は話を逸らすかのように、いそいそとロビーのテーブルを片付けながら俺は理恵ちゃんに問いかけた。

「それより、どう？ バンドの調子」

「え？ あ、すごく楽しいですよ。みんな仲良しだし」

「そりゃいいじゃん」

「デルさんのバンドは？ そうそう、昨日ライブだったんですよね！ 行きたかったなあ……。どうでしたライブ？」

そりゃ、そうなるよな。ここで会話してりゃその話から逸らすことは出来ない。俺は理恵ちゃんなら良いかと打ち明けることにした。

「えーっと……。はは……。解散しちゃった」

「えっ！」

解散と口にしたら彼女は驚き立ち上がり、同時にすごく悲しい顔をしてくれた。「なんで、どうして？」って少し涙目になりながら。

こんなちっぽけで誰も知らない存在だった俺たちのバンドでも、解散を悲しんでくれる人が居るんだって思い知った。尤も、その有難みをちゃんと理解できたのは、もっともつと後のことだったけどさ。

「これからどうするんですか？ まさか、音楽辞めないですよね」

「そりゃもちろん、ギターは続けるよ」

「……良かったあ」

ホッとした表情で理恵ちゃんは椅子に腰かけてジュースを手にと一口喉を潤した。少しは落ち着いてくれたようだ。

「私、デルさんの曲好きなんです」

なんだ、『俺』じゃなくて俺の『曲』が好きなのか。じゃなくて……。嬉しいこと言ってくれるぜ。やっぱりこれは恋愛フラグ決まりだな。

「今の私にとってデルさんが目標なんです」

「あ、ありがとう」

これは、アレだな。このまま告白タイム突入しちゃうのかな。そりゃそうだよな、やっぱりロッカーには女が必要だよな。なーんてバンド解散そっちのけでふわついていたその時、キキツという音と共に店のドアが開いた。

「おはよう」

「あ、おはようございます店长」

何というバッドタイミング。この店のオーナーのおかわこうじ小川功治さんが

現れた。しかもこの人は理恵ちゃんの父親ときたもんだ。

「なんだ、来てたのか」

「うん」

店長はあまり理恵ちゃんの音楽活動を歓迎していないみたいだった。理恵ちゃんもウザそうに雑誌を読み始めた。あーあ、告白タイムはこりゃ無いな。

「デル君、ちょっと良いかい？」

「はあ？」

俺は店長に店の外へ誘い出された。

店長の正体はもう三十年近く前。そう、バンドブーム盛んな八十年代に一世を風靡した本格派ロックバンド、『やぐらかべ櫓神楽』のギタリストだった。店長が作詞作曲した「鏡」は当時ヒットチャートを賑わしたが、その後は鳴かず飛ばず。地味に音楽活動を続けているうちに、ひっそりとこの町でスタジオをオープンさせたんだ。

「デル君に話がある」

店を出るとタバコに火をつけた店長は、どこかバツ悪そうに俺にそれを告げた。

「実は今年いっぱい店を閉めようと思うんだ」

「はい？」

「悪いが、君に店を手伝って貰うのは今日までってことに」

「……はい？」

「すまない」

ビルの片隅に据え置かれた灰皿に、二度三度とタバコの灰を落としながら、店長は俯きながら俺に謝った。まいった。告白タイムってこっちかよ……。俺は文字通り頭が真っ白になっちまった。

- 4 - 星占い

目覚めの悪い朝だった。こんな日に限ってやけに朝日が目に染みるほどに輝いてやがる。だからカーテンは遮光性の高いものにしてくれつつたのに。

頭をバリバリと搔きながら、枕元の携帯電話を手にとった。なんだ。まだ八時じゃねーか。いつもならチャリンコぶっ飛ばしてバイトに向かっていている時間だ。

そうだ、俺は今日から無職になっちまった。ふと、昨日の店長の申し訳なさそうな顔と言葉が浮かんでくる。

「本当に悪い。もっと早く伝えるべきだったんだが、色々あって」

「そうっすか……」

とは答えて納得した振りをしてみたが、当然のごとく納得なんてしちやいなかった。まさか無職で年を越すことになるなんて想像もしていなかった現実。

バンド解散、バイトをクビ。一体この負の連鎖はなんなんだ。昨日の朝にテレビでやっていた星占いは一位だった筈だ。大体あの手の占いなんてもんは、順位が低い方が当たるんだ。バカにしゃがつて、と、ブツブツ文句を垂れながら、部屋のテレビでその星占いを観ている俺がいる。

「——今日の蟹座のあなた！ おめでとうございます！ 二日連続の一位です！ 突然の恋のチャンス。あなたの魅力が最大限に発揮

できる一日です」

なんだろう、このモヤモヤとした不安な占いは。二日連続で同じ星座が一位なんて今まで聞いた事がないぞ。なるほど、俺の凹み具合を案じてわざわざテレビ局が調整してくれたんだな。

「……あほらし」

バカな考えで自分を慰めるのにも限界がある。再び布団を被ってふて寝を決め込もうと思ったなら携帯電話が鳴りやがった。

「おはよう」

「おはようございます」

「悪いね、朝から」

「いえ、大丈夫ですよ。いつもならもうスタジオに居る時間なんで」

「ハハ、そうだったね」

店長からだ。聞けば今月分の給料を早速払ってくれるらしい。ま、そういうことなら貰っておかなきゃな。

身支度を済ませて家を出ようとする俺に、オカンが怪訝な顔で問いかけてきた。

「今日はやけにゆっくりじゃない」

「え？ んぁ……。いつてきまーす」

オカンにはまだ何にも話してない。大学進学もせず、音楽に打ち込みたいと半ば強引に押し切った二年前の高三の俺。バイト代からわずかでも一応家に金は入れてきたからか、何とか親からのプレッシャーをかわし踏みとどまっていた。

でも、その音楽も、仕事までも失っちまった今、何を言えるのか。オカンはともかく、もう一年近くマトモに口も訊いてないオヤジになんてなおさら……。

うつろな顔でチャリンコを漕いでいるのが自分でもよく分かる。もうこんな清々しい朝にスタジオへ駆けつけることも無いのか。何だか感慨深い反面、突き付けられている現実を何とか振り飛ばしたい一心でもあった。

「おはようございます」

「ああ、悪いねわざわざ」

スタジオのドアを開けると店長が忙しそうに片付けを始めていた。店長のやつれた顔から、昨日会員の常連さんらにひたすら謝り続けた疲労感が伝わってくる。

「店長、別に俺は今ヒマですから、手伝いくらいしますよ」

「ありがとう、でもな、これ以上君に迷惑はかけられんよ。こんな急な話になったことは本当にすまないと思ってる」

「はあ」

何か引つかかった。店長は何かを隠している。俺には何となく分かったんだ。俺はその理由を尋ねてみたのだった。

- 5 - 東京

「店長、ここ閉めてどうするんですか？」

この質問は別段含みを持たせたものじゃあない。普通に出てきた疑問だった。でも、店長にとってはかなり核心を突かれた一言だったらしい。どこか焦ったような表情が見て取れた。

「いや、まあ……」

やっぱり何かあるようだ。目が笑ってないワイドショーの芸能リポーターよろしく、興味本位でさらに突っ込んでその奥に潜んでいる裏話が聞きたくもなる。だが、たかがバイトの俺がそれを聞いた所で何にもならないのは、店長が言葉を濁した時点で察しはつく。

「あ、いや、話しくいならいいです。ハイ」

「……実はな。東京で新しくスタジオを開くことになったんだ」

「えっ！ マジっすか」

東京。この田舎町から車で軽く数時間はかかる、憧れの大都会だ。俺の高校時代の連れも、『上京』という言葉の響きだけに誘われてわざわざ東京の大学を選んだ奴も少なくはない。

そんな時は鼻で笑っていた俺だった。お前ら単に『東京人』になんたいだけじゃねーのか？ そこにポリシーはあるのかよってさ。でも、今にして思えばそれはミュージシャンにだって言えることだった。東京に行けば活動できる場所も、売り込みのチャンスもこんな

田舎町とは比較にならないはずだ。

いつからか俺も東京という言葉の魔力に、ついつい惹きこまれそうになっていたことは否めなかった。そんな折に店長から飛び出した東京進出のニュース。俺は「何だよアンタだけ」という嫉妬心と同時に、素直に「羨ましい」という感情が交錯していた。

すると店長は意を決したように俺に向かって話し始めた。

「デル君、もし君さえ良ければ……。私の……。東京の新しい店を手伝ってくれないか」

「ええっ！」

俺は思わず身をのけ反らせて、かなり大胆なりアクションで驚いた。だが、やはり俺って男は嘘をつけない性格だ。次の瞬間にはニタニタと目の奥で笑みを浮かべながら「いやっ、そんな、俺なんてそんなっ」と、とりあえず謙遜してみせた。

「いや、そうだな。まったく、どこまで私は勝手な奴なんだっ！」

はあ？ ノーッ！ そんなことは無いんだっ！ アンタ最高にイカした事を俺に告ってくれたんだ！ 俺はアンタに一生付いていく覚悟……は、ぶっちゃけ正直しかなかったけど、これからしてみせるつもりさっ！ と、脳裏を駆け巡ることわずかコンマ何秒。

「すまない、今の話は無かったことにしてくれ」

店長がカウンター横のレジを開けて茶封筒を手にした。さらにそのレジに入っていた数枚のお札を無造作に取り出すと、そのうちの

何枚かを茶封筒にねじ込んだ。

「今月分の給料と、少ないがこれはこれまでの君への感謝の気持ちだ。受け取ってくれ」

「え、いや。そんな、いいっすよ」

いいんだよっ！ そんな二、三日で繁華街の居酒屋に飲み込まれるはした金よりも、将来の安定を俺に与えてくれっつーの！ ん？
まてよ。ロッカーが安定を求めるなんて何かおかしくねーか。例えば公務員やつてるクセに『国のバカヤロー』なんて歌ってる奴が本当にロッカーって言えるのか？ と、脳裏を駆け巡ることわずかコンマ何秒。

「何も言わず取っておいてくれ。それに、まだ若いと言っててもこの不景気じゃ仕事を探すのも大変だろう。失業保険というわけじゃないが、足しにしてくれ」

「……いや、その」

すると店長は深々と俺に頭を下げた。俺が「頭を上げてください」と何度言っても聞く耳を持つともせず。何だかここまでされると居心地が悪い。結局、俺はそのままスタジオから引き上げることにした。

「はぁ……。なんかドツと疲れた……」

店の外に出るとスタジオでの緊張感もあいまって、吹き付ける風が無性に冷たく感じる。

「東京かあ……」

このクソ冷たい空気がどこかで生まれて、今俺の頬に風となって突き刺さるのと同じように、俺の知らないどこかで、ひよっとすると何かが動き出しているんじゃないか。そんな風に感じたその時、突然その娘は現れたのだった。

・ 6 ・ 告白プラン

「おはようございます」

「あ、理恵ちゃん。おはよう」

どうやら今日俺に給料を渡すって事を店長から聞いたらしい。つまり彼女はわざわざ俺に会う為にココまで駆けつけてくれたってワケだ。まてよ、おい、これは今朝の星占いビンゴの風向きじゃないか。ここを辞めた今、もう彼女ともそうそう顔を合わすことは無いはず。

——男なら……今日決めるしかないだろ——

俺の中で何とも意味不明な自信が沸騰し、ヤカンから熱湯が噴出している。

「ちょっとだけ、時間いいですか？」

「もちろん！ ガス漏れチェックOK！」

「……？ じゃあその公園でも行きます？」

いやはや、それにしてもこんなベタな展開があって良いのだろうか。俺は今朝の星占いを一語一句忘れちゃいない。

「——今日の蟹座のあなた！ 突然の恋のチャンス。あなたの魅力が最大限に発揮できる一日です」

本当の事を言えば前からめちゃくちゃ理恵ちゃんのが気になる
っていた。いつも笑顔で明るくて、俺らのバンドの事を真剣に応援
してくれて。瞳パッチリあばたもエクボな存在だった。それに気づ
いていて何となく彼女の親である店長という存在の手前、自分の心
を騙してきたフシがある。

でも、もう失う物なんて何もない。こうなりや本気の俺を理恵ち
やんに伝えるべきなんだ。

公園のベンチに腰を掛ける二人。さっきまでのスタジオとはまた
違った緊張感が張り詰める。俺は彼女の……、いや、自分自身の気
持ちをほぐす為、まずは音楽活動の今後について触れてみることに
した。

「スタジオ閉めたら理恵ちゃんのバンド練習も難しくなるんじゃない
い？」

「そうですね……。っていうか、デルさんこそどうするんですか？」

「俺はまあ、ギターさえありゃ練習も家で出来るし……。もうバン
ドじゃないからさ」

「あ、そうじゃなくて……。えっと」

「……？」

そうだ、すっかり忘れてた。俺は今、完全に無職なのだ。フリー
ターのプー太郎ではなく、ニート……じゃねーぞ。無職のギタリス
ト。……ま、あんま変わらないか。

とにかく理恵ちゃんの心配を取り除いてやらなきゃ。もし彼女と付き合うにしても、カレシが無職はそりゃ厳しいっしょ。

「うーん、いや、仕事は何か見つけるし。バイトなら選り好みしなきゃ幾らでもあると思うしさ」

「……ごめんなさい。父さんのせいで」

「なんで？ 理恵ちゃんが謝らなくてもいいじゃん。気にすんなって」

少しは笑みを浮かべたけど、何だか理恵ちゃん淒く凹んでいる様子だ。確かに数少ない練習場所が無くなるのは困るけど……。とにかく彼女がいつものテンションじゃないことは、何となく感じていた。

てか、こんなことじゃ告白のムード作りもままならない。軌道修正を掛けるべく、気づけばいつの間にか彼女を励ますことに必死だった。

「ほら、学校の音楽室とか借りればできないの練習？ そうだよ、いつそ軽音部でも作っちゃって……」

「うん、そうですね……」

何だか話がズレている。さっきからの俺の言葉が全く彼女に響いていないのは、女心に鈍感な俺でも何となくわかる。どうやらスタジオを閉める事とは次元が異なる世界で悩んでいるようだ。

さてよ。ひょっとすると彼女、本当は俺に告るつもりで今日来た

のかも。なるほど、さつきから音楽の話がやけに右から左に流れていくのもそれなら一理ある。つまり、俺がそっちの話ばかりするから、彼女は切り出すタイミングが無かったんだ。そうと分かれば……。

「……うーんと。それはそうと今日冷えるよな」

どうだい、この俺の絶妙な話題転換。これで少しの間遠くを見ていれば、それなりに彼女もそっちの話を切り出しやすい空気になるってもんさ。

ん、まてよ。でも女から告らせるってのは、ロッカーとしてどうなんだ？ ちょっと痛いよな。やっぱここは男らしく俺から切り出さなきゃ。

「あの、さ……」

すると俺の言葉を遮るように理恵ちゃんが唐突にそれを切り出してきた。

「実は……」

「え？ あ、うん」

「うちの両親……。離婚することになったんです」

「……は？」

「私、どうしていいのかわかんなくて……」

唇を噛み締めて俯く理恵ちゃん。想定外のその話題の前に、俺の脳内の台本に書き上げた、浅はか過ぎる告白プランが物音を立てて崩れていった。

- 7 - 赤外線通信

帰路に着く俺にさらに手厳しい冬の風が吹き付ける。自転車を漕ぐ気力もどこか抜け落ち、やけに重く感じるそいつのハンドルを握りトボトボと歩く俺。

結局彼女とはそのまま別れちまった。何一つアドバイスや元気づける事もできないまま……。音楽の事ならまだしも、離婚なんて全く縁もゆかりもない話題にどう応えれば良いのか。

「ってかき、んなテーマ重すぎるっつーの……」

つついボソツと呟いた。俺お得意の大きな独り言だ。

その時だった。ふと何故か分かんないけどケインの顔が浮かんだんだ。

「……バンドの解散も似たようなもんだよな」

思えば「バンド組もうぜ」って言って誘ったのは俺だった。二人してあーでもない、こーでもない、作詞や作曲しては「フレーズが変だ」とか、「リフがしょっぱい」って喧嘩もした。その翌日にはケロっとした顔して、つまらない話で笑い飛ばしたっけ。

アイツと俺は赤の他人同士で、性格も全然真逆だけど、同じ目標目指して頑張ってきたんだよな。そんな二人が別れる理由って……。

「そっか！ そうだよ、二人の目標がズレたんだよ」

あれ？　そういや俺の目標って何だったっけ……。それに、ケインの目標って……。

「……。ああ、悪い。お前も居たっけ」

考慮の片隅で「俺の存在は無視か」とマッチョが小気味よいステップを踏み、タンバリンを叩き鳴らしながらこちらを窺っている。忘れてたつもりはないが俺の脳裏でコソコソすんなよな。

その時だ、後ろからその声が近づいてくる。

「デルさん！」

振り向くと向こうから自転車に乗ってやってくる彼女の姿。小柄でそんなに体力も無いクセに全力疾走してる。その姿はもはや後光どころではなく、全てが輝いているじゃないか。ヤバイ、このシチュエーションは……。俺好みだ！　……。じゃなくて。

「良かった……。追いついた」

息を切らし呼吸を整える彼女に思わずクラツときちまったが、俺はロツカーらしく平然を装う。

「どしたの？」

「あの、さっきはごめんなさい。急にあんな話して」

「……いやあ、で？」

「それだけ言わなきゃって」

「そ、それだけ？」

「はい」

「……。わざわざそんな事を言う為に？」

マジか。おいおい時代は平成だろ。この娘どんだけ純粋なんだよ。さらにクラクラツときちまったが、俺はロツカーらしく平然を装う。

「いや、それより俺も何にも励ます事できなくて」

「いいんです！ 誰にも言えない話、聞いて貰えただけでも凄く嬉しかったです」

「そ、そう」

「だから、さっきの話は無かったことにして下さい」

そのフレーズが今日二度目の響きだとピンときたもんだから、ついつい言っちゃった。

「はは、そのセリフ店長にも言われたよ」

「え？」

「やっぱり親子だな」

「……えー。それショック」

「え？」

あれ？ 俺何か悪いこと言ったっけ？ いきなり不機嫌な顔をしたら理恵ちゃんにちよつとパニくった俺。だが、そこは目だけキョドつて平然を装う。

「私、ちゃんと考えます。父さんか、母さんか……どっちに付いて行くかわかんないけど、音楽も頑張つて続けます！」

「うん、それで良いじゃん！ 応援してるからさ！」

すると理恵ちゃんは携帯電話を取り出した。

「あの……。良かつたら、デルさんの番号教えて貰えませんか？」

き、ギター！ 突然ギター。完全に消えかかっていた俺のコンロに火が付き、猛烈な勢いでヤカンの水が沸騰する。もちろん、そこは燃えたぎる俺の想いにそつと蓋をして「こつちこそ喜んで」と赤外線通信を始めるのだった。……おつと。緊張からか、うまく通信出来ずに二度、三度やり直した事はオフレコだ。

「これからも音楽の事とか相談に乗って貰ってもいいですか？」

「もちろん！ 気にせず何時でも！」

思えば、彼女の電話番号すら知らなかったんだよな。てか、そんなこと簡単に聞ける環境でも無かつたし。相手は客でもあり、まして雇い主の娘なんだから……。

「有難うございます！ じゃあまた！」

「うん、気を付けて」

やっと理恵ちゃんの笑顔が見れた。それだけで何だかすんごく満足した気分だった。……この時だ。俺は彼女の笑顔にずっと癒されてきたんだなって改めて思い知らされたのは。

家に帰って部屋に戻るとさっきまでの鬱な自分はどこかに飛んでいた。もちろん、あ後は自転車も軽快に漕いで帰ってきたくらいだ。自分でも表情が緩んでいる事が良く分かる。告白は出来なくても、とても清々しい気分だった。

「ま、これからゆつくりとな」

大きな独り言も快調な午後ひとときに、ふと疑問が湧いてくる。店長が東京に行くって事は、理恵ちゃんが父親を選んだら……。

「おいおい、それって」

そうだ、もしそうなっちまったら「これからゆつくり」などと悠長な事言っている場合じゃない。いやいやまてまて、高二の彼女にとつて来年は受験じゃないか。大事な時期に転校なんて難しいよな。きっと母親と一緒にこの町で暮らすに決まっているって。……でも、万が一彼女が父親に付いていくって決めたら。

「俺……行けるのか。東京に……」

すると階下からオカンの苛立っている声が聞こえてきた。

「ちょっと！ 昼ご飯冷めるじゃないのっ！」

「……はいはい。今降りるよっ」

この際、電話番号とかメアドだけじゃなく、心の赤外線通信も出
来りや良いのになと、何となく感じた俺だった。解散、無職。それ
でもそんな時はまだ、理恵ちゃんっていう光が見えていたから、少し
くらいは余裕もあった。でも、そのゆとりは永く続かなかった。

- 8 - ヤンダラ

新年を迎え、数日が過ぎたある朝だ。俺はホテルのベッドでのうち回っていた。どうも昨日の夜食べたゴーヤチャンプルが原因なのかもしれない。何か思っていた以上に苦かった。だからすこぶる胃腸が芳しくない。

窓から差し込む光に誘われて、俺はノソノソと窓辺に立った。一面に広がる青い海。これが本当のオーシャンビュー。少し高かったけど、どうせならこの景色を見ておかなきゃな。

——俺は独り沖縄に来ていた——

怒涛の年末、そして廃人と化した年始。身も心も疲れ果てた俺が選んだ場所がココだった。

仕事を探してもなかなか決まらず、家に居てもオカンやオヤジの顔を窺う毎日に発狂寸前になり、有り金全部預金通帳から引き出して「ちよつと出て来るわ」とギター片手に家を飛び出したんだ。ま、『ちよつと出て来る』って距離じゃないが。

ホテルの部屋から出た俺は、すぐ傍にあるプライベートビーチに訪れると、穏やかに波打ち寄せる砂浜にドカツと座り込んだ。シーズンオフの平日。宿泊客らしき人もまばら。その名の通り殆ど俺だけのビーチ。

「……すげーな」

なんという解放感。この間までの苦痛の日々が洗われていく……
って、簡単に心を洗えたら苦労しねえ。ま、一月ということもあつて、多少は冷ややかなこの潮風も、あの時の突き刺さるような北風に比べりゃ月とすっぽんだから良しとするか。

以前、『ヤンデレ』という言葉を目にした。恋に病んだキャラクターの事を指すらしい。が、俺はその一歩先に行く。これは『ヤンダラ』だ。最近は精神的に病んだ奴が、何故か沖縄に訪れる傾向にあるらしい。病んで沖縄でダラダラする。これぞまさに『ヤンダラ』実行中のこの俺だ。そのうちウィキペディアにも載るかもな。

一面の水平線を眺めるうちに、幾つもの言葉という言葉が駆け巡っていく。あの大晦日の夜。理恵ちゃんから初詣で賑わう神社の外れに呼び出された俺――。

「――色々心配かけてごめんなさい」

「いや、でも理恵ちゃん自身が決めたんならそれで良いんじゃない」

「昨日も、一昨日も全然眠れなかったけど、やっと決心ついたら何だか気が抜けちゃって」

「だよな。いや、真っ先に俺に話してくれて嬉しいよ。……まあ、理恵ちゃんと離ればなれになったら店長は寂しいだろうけど」

「どうかな……。私のバンドの事も認めて無かったし」

「そんな事無いと思うけどなあ。東京に行っても、きっと店長は陰

で応援してると思うよ。たとえ離婚したって理恵ちゃんの父親に変わり無いんだから」

そんな時は俺もホッとしたんだ。理恵ちゃんが父親では無く、母親と生活するって決めた事に。今の病んだ俺に必要なのは東京という街の魅力より彼女だ。理恵ちゃんとの関係を大切にしようって思っていた。

「そうそう、あの後店長から電話あったんだよ」

「え？」

「いや、改めて言われたんだ。『東京に来る気は無いか？』って」

「ホントに？ 父さん、そんな事言ってたんですか？」

「なんだ知らなかったんだ。いや、あれで店長も俺の事気遣ってくれてんだと思うよ。だって仕事はあるし、音楽だって続けられるし。この町と同じ生活を送れるワケじゃん。……それに、何より東京なら色々とチャンスも増えるだろうし」

「そっかあ！ 父さんも結構良いトコあるじゃん」

「でしょう？ だからきつと理恵ちゃんの事も応援してるって」

「それで、デルさんはどうするんですか？」

「え？」

正直言えば即答で「行かない」って言える気持ちだった。でも、

スグに答えずに言葉を濁したのは、理恵ちゃんの父親って事への配慮もあつたわけで。

「いや、うーん……。まだ決めてない」

だけど、実際はどこかで音楽という夢が俺の中に残っていたのかもしれない。だから、自然と「行かない」って言葉を抑えつけたんだ。

「ですよ。そんな簡単に決められないですよ」

「やっぱ、親を残して飛び出すにはなかなか勇気が居るもんだぜ。住みなれない街に出ていくのはやっぱ不安もあるよ」

「あはは。確かにこの町、なーんにも無いけど凄く居心地良いですよ」

「そうそう、そうなんだよ、愛着っていうかなんて言うか」

「だから私も凄く迷ったんです。でも、どっちを選ぶってなったら、やっぱりお母さんの方かって」

「うん、なるほどね」

「だから、『住みなれない町に出ていく勇気』ってすごく良く分かります」

「うんうん……。うん？」

「私、北海道なんて行ったコトないから」

「……はい？」

「母さんの実家、札幌なんですよー」

「……」

「……？ どうしたんですかデルさん？」

その後の彼女との会話の内容は、あんまりおぼえてねえ。

どこまでも続く水平線。その向こうには一面の海と空しか見当たらない。でも、それは俺がここに立ち止まっているからだ。俺が一步踏み出せば、必ずその先には陸地が存在する。そこには今の俺には想像もつかない道があり、出会いがあり、夢がある。

「踏み出す一步かあ」

ふと立ち上がった俺は何気なく波打ち際まで歩み出す。そんな俺をめがけて勢いよく白波が足下に押し寄せる。

「んだよっ！ 沖縄の海のクセに冷たいじゃねーかって！」

スゴスゴと後方に退散する俺。一步踏み出すつつたって、今の俺には船も無いじゃねーか。

「はあー」

再び砂浜にばったりと腰を下ろす。分かっている。踏み出さなきゃいけないってことは。でもさ、あまりに神様は残酷だ。どん底でもいいよ。でもせめてさ、恋でもしてりや多少は音楽へのモチベーションにもなるっつーの。それすら引き離しちゃうんだもんない。

「はあーやだやだ」

俺はその場に大の字になって空を見上げた。雲はのんびりと果てしない海の間こうに流れてゆく。出来れば相乗りでいいから俺も連れてってくれねーかな。

「このまま町に残るか、思い切って東京か。それとも……」

その雲に誘われるように今一度目の前に広がる大海原に目をやった。そうだよ。結局今の俺にとって理恵ちゃんとは何にも始まってないし、何にも終わってねえじゃねーか。

「……新天地が札幌つてのも、悪くはないよな。……うん、そうだよ」

その時、何だかすんごく気持ちが楽になったんだ。半ば強引に自分自身を諭しているようなもんだったけど。俺はズボンのポケットに突っ込んでいた携帯電話に手を伸ばしていた。

「あ、い、う、え、小川理恵つと……」

その名前を呼び出し、通話ボタンに指を乗せると、呼吸を整えるべく一息ついた。決意が鈍る前に彼女の声が聞きたかったんだ。

「っしやー!」

意を決し押そうとした時だ。画面から『小川理恵』の文字が消え失せ、同時に懐かしい名前が表れた。さらに追隨するかのように、その昔何度も聴いた着メロがそこから発せられた。

「もしもし……」

思いのほかスムーズにその着信を受け入れた。意外な人物に一瞬戸惑ったが、何よりこの沖縄という土地が、気持ちをとおらかにしてくれていたのかもしれない。そいつは当時と変わらない明るい声

で喋りかけてきた。

「やつほー。ケタロー」

「……何だよ」

「久しぶりなのに『何だよ』ってことないっしょ。ケタロー」

「あのさあ、いい加減その呼び方やめてくれよ」

「あー、何？ まだ嫌いなんだ？ …… たく成長してないねえ」

「つるせえ」

「でさあ、ケ・ケ・ケ・ケ・ケータロ」

「てめえ……」

電話の相手は和泉いずみ薫かおり。俺がバンドを組む前。高二の頃に働いていたバイト先で知り合つて、たった一週間で意気投合し、イケイケドンドンで付き合つた。が、たった三カ月で別れちまつた元カノだ。

「ケタローと電話すんの三年ぶりくらいだよねー」

「チッ、何度掛けてもお前が電話に出なかったんだろ」

「ほら、そうやって自らを省みず、人のせいにするトコもまだまだ成長していないねー」

「うるせえ。その上から目線も変わんねーな」

「当たたり前つしよ。アンタより五つも先輩なんだからね」

「五つ……。そっか、へえ。薫ってもう二十五歳になったんだ。へえ、二十五ねえ……。うひゃひゃ。二十五かあ」

「……アンタ。張り倒されたいの？」

「いや、ゴメン。すいません。調子に乗りすぎました」

「それよりさあ、今ナニしてるの？」

「沖縄で『ヤンダラ』中ですが何か？」

「は？ ……ツツコミ所が多くて困るんだけど」

俺は妙に落ち着いていた。心が凄く落ち着いていた。懐かしさというか、久々に会話できた嬉しさというか。鬱だった俺の気分が、この青い空のように急速に晴れやかになっていた。この穏やかに流れてゆく沖縄の時間がそれを後押ししてくれたのかもしれない。

俺は「薫コイツになら良いか」と、この年末年始にあった出来事を全て打ち明けた。薫は節々で嫌味なチャチャを入れてきたが、それもまたあの頃繰り広げてきた俺たちのコミュニケーションだった。

「そうかあ。色々あったんだねえ」

「まあな」

「で、どうすんのよ？ その、理恵ちゃんを追っかけて札幌行くの

「？」

「……。まあ、今はそうしよっかなと」

「はぁ……。アンタさ、バツカじゃないのお？」

「うつ……。言われなくても分かってるよ。でも今はそれしか考えらんねーんだよ」

「そっかぁ」

「そっだよ……」

「でも、アンタたち付き合っても居ないんだよね？」

「そりゃ、そうだけどさ」

「なのに、札幌？」

「まあ」

「……えーっと」

「……ん？」

「バツカじゃないのお？」

「ガッ！　うるせーな！　別に付き合うとか、付き合わないとかそういうのはどうでも良いんだよ！　今はこんな俺の曲でも応援してくれる彼女の存在が唯一の原動力なんだよっ！　放っておいてくれ

って！」

思わず語気を荒げちまった。と、微妙な間が携帯電話の向こうから漂ってきた時、こんな俺でも「しまった」と内心感じた。元カノ相手に八つ当たりしてこんなのどう考えてもみつともないのは分かってる。でも、それがその時の正直な俺の答えだった。

「……ま、いいわ。とりあえず今はヒマしてるんだよね？ ケータロー」

「ああ。でももう決めたんだ。今日にも沖縄から家に帰って仕度をするつもり」

「だから、今日はヒマって事だよね？」

「……？」

次の瞬間、俺の真横に忍び寄ってきた人影にゾクとした。風になびく花柄のスカート。見上げると太陽に映える真っ白なシャツ。そして胸元まで伸びた長い髪。その時俺は顔を確認するまでもなくそいつの正体を理解した。

「は？ ……はあ？ 何でお前がココに居るんだよ！」

「はいはい、その前に……。さっきの『二十五』の件について」

フルスイングされた薫の細い右腕から繰り出されたリアット。見事に張り倒された俺は、そのサラサラしたビーチの砂に、したたかに頬を打ち付けたのだった。

- 10 - ライヴハウス

陽も暮れかけていた頃、俺は薫の運転する車に乗っていた。まさかこんな場所で三年ぶりに元カノに会うなんて、何という偶然。いや、これはもしかや必然？ …… んなわけないか。

三年前。薫はかねてから希望していた東京に本社のあるイベント会社の就職が決まり、俺と知り合ったバイト先を辞めて、そのまま東京へと発って行った。

その頃ちよつとした意見の食い違いが重なって、あんまり口も訊かなくなっていたこともあり、薫との関係は結局そのまま自然消滅みたいな感じで終わっていたんだ。その理由は…… 東京に一緒に行くか行かないか。

「さて、着いたよ」

薫に言われるままついてきた俺。そこは那覇市内にあるライヴハウスだった。

「いらっしやいませ」

「こんばんは。もう始まつてるんだね」

そう言うと薫はバッグから何かしら身分証らしき物を受付に提示した。すると特に制止されるわけでもなく、いや、むしろ「お待ちしておりましたご主人様」的な対応で中へと通される。何者なんだコイツ……。

防音扉の中に入ると生暖かい空気と共に、小気味よいビート音やら何やらごった返す、騒々しい音の羅列が飛び交っていた。そう、何の事は無い。これはつい先日まで俺らだって出していた音と空気なんだ。

思えば聴く側の立場でライブハウスに入ったことは初めてに近いかもしれない。こうして予備知識も無くふらりと立ち寄る場末のライブハウス。そこでどんなミュージシャンが、どんな音楽を提供してくれるのか。好き嫌い関係なく、毎日多彩な顔ぶれが登場して新鮮な音を楽しむことが出来る。それがこの手のライブハウスの良さなんだよな。

「俺らのバンドの事なんか知りもしない客は、こんな気持ちで入ってたんだろっなあ」

「え？」

「いや、大きな独り言」

ステージでは数名の若者、といっても俺と同年くらいかちょっと年下くらいの連中が、マイク片手に客を煽りながら唄い、演奏している。薫によれば那覇市内でも指折りのライブハウスがビッシリ埋まっていた。それも殆どが中高生くらいの女子だ。

……ヤバイ。さっきから非常に居心地悪いのは何故だ。今まさにステージで音を出すコイツらと、さほど変わらねえ歳のはずなのに、そうか、ぶっちゃけ俺たちの演^やつてた音って、こういう女子中高生を相手にするようなモンじゃなかったんだ。俺たちはロックンロールやってたんだよ。どうりでこの環境に慣れないワケだ。

「……！」

ステージの彼らよりも、むしろ客席に圧倒される俺に驚いた。何だろう、この歯がゆさは。そしてそれと同時にステージで歌い、演奏する彼らを見て湧き起こる悔しさは……。

……そうなんだ。さっきからズキズキ感じるこの場違いな感覚は、客層とか聞き手の問題じゃない。ただの未熟な自分たちの音への慰めに似た強がりだったんだ。そして、音を楽しんでいる大勢の客の前でパフォーマンズできるステージの彼らに対する嫉妬心。

すると薫が俺の耳元で尋ねてきた。

「ねえ！」

「は？ 煩くて聞こえない！」

「彼らの音楽！ どうよ？」

「は？ どうって」

「若くて勢いあるよね！」

「そうだなあ。……てかさあ、俺はこういうチャラチャラしたバンドってあんまり好きじゃねえんだ」

「チャラチャラ？」

「ああ！ それにほら、メンバーにラッパーまがいも居るだろ？ 正直、ウケ狙いでああいうのやってる奴らって無いわあ」

「ウケ狙いねえ……」

「とにかく俺はあんまり好きじゃねえな！」

「でもさ、ただのウケ狙いでこんなにお客さん集まるかな？」

「えー？ 何て？」

「何でも！ とにかく暫く彼らの音聴いてあげてよ」

正直言えばさっさと引き揚げたかった。それに元々今日中には家に帰る予定だったんだ。それを「明日に延ばして」って薰がしつこく言うからわざわざついてきたのに、何で聴きたくもない連中の音に付き合わされなきゃなんねーんだ。……そりゃ今夜の宿代まで出すって言い出したから根負けしちまった手前、今更文句を言ってもしょうがねえけどさ。

本当にそれくらい俺の嫌いな音だった。ステージの連中の振る舞いも、中高生に媚を売るような音も無性にイライラした。……そう、それも結局俺のただの嫉妬心だったんだ。その時はそこまで気づけなかったけど。

それから約二時間近く、俺はとことん居心地の悪い感覚に包まれたままその場でボーっとしていた。きつと周りの中高生は「何なのコイツ？ 鬱陶しいから帰れよ！」って言いたくなるほどに、俺は不機嫌極まりない顔をしていたに違いない。

聴きたくもないアンコールに二度、三度と付き合わされ、精根尽き果てた俺を尻目に、エネルギーを発散しスッキリした表情を浮か

べ、ステージの余韻を引き連れた中高生たちが、キャツキャ言いながらライヴハウスを出ていく。

「対照的とはこのことだなあ」

と、気づくと薫の姿が無い。思えば俺はホールの隅っこに出番なく申し訳なさそうに佇んでいたテーブルと共に、盛り上がるステージに目もくれずチビチビと酒を飲み続けているだけだったんだ。確か「ちよつとここに居てね」と言い残し、薫はどこかに消えたんだ。

「どこ行っただよアイツ」

すでに客の居ないホールではライブの後片付けが始まっている。一応薫の連れつてことが伝わっているのか、取り立てて退場を迫られることも無く、俺はそのままテーブルで薫を待っていた。すると薫がニヤニヤしながらこっちへやって来た。

「お疲れー」

「どこ行っただよ」

と、薫の後ろからゾロゾロと若い集団がやって来た。

「じゃーん。彼らが今沖縄で注目されているバンド、『黒南風』だ
「よ」

「どうも、初めましてー!」

「こんばんはー!」

どういうことだ。ついさっきまでステージで演じていた六人のチヤラ男……。もとい、メンバー達。その全員がめちゃくちゃ低姿勢で俺に挨拶してきたじゃないか。

「……ど、ども」

「で、彼がさっき言ったギタリストのデル」

「今日はわざわざ僕らのライブに来ていただいて有難うございます！ 僕、黒南風のリーダーやつてる島村 兼一しまむら けんいちって言います。『シマケン』って呼んでください。今後ともよろしくお願いします」

「あ、いやこっちこそ……。えと、デルです。よろしく」

その後、メンバーひとりひとり、しっかりと礼儀正しく自己紹介してきたじゃないか。なんなんだこの好青年達は……。

「僕ら和泉さんにはいつもお世話になってます」

「お世話ってホドじゃないっしょ」

「あ、そうですね。ホントかなり、お世話になってます」

「アハハ、何それ？」

何だか楽しそうに盛り上がる二人。俺はただただ苦笑いするしか無かった。っていうか……薫コイッ一体何者なんだ？

「デルさん、僕らのステージどうでしたか？」

シマケンが唐突に問いかけてきた。正直、この質問は予想できたが、さっきまで薫の前でボロクソに彼らを批判していた俺がココに居る。

「……う、うん、いや。そうだなあ」

もう、とにかくここから逃げ出したい一心だった。

- 11 - 掌の夜

シマケンのその問いかけに言葉の詰まっている俺を察したのか、薫が助け舟を出してくれた。

「彼も言わばライバルだからね。そんなの簡単に答えられるワケないじゃん」

「ははは、そうですね、すみません変な事訊いて」

「え？ いや。でも、新鮮だったよ。あんまり好んで聴かない音だから」

「あ……。そうなんですか……」

少し寂しそうなシマケンの言葉。ふと横に居る薫を伺うと呆れた顔でこつちを見ている。ようやく大馬鹿発言を口走ったことに気づいた俺だった。薫、すまねえ。

「でも、最後までここに残って頂けただけでも僕たちは満足です。デルさんのように、まだ僕らを知らない人達を振り向かせられるようなバンド目指して頑張ります」

「よっ、格好いい。シマケン」

「茶化さないで下さいよ和泉さん」

「いやいや、今のコメントはとも十六には思えないすっかりしたもんだよ」

じゅ、十六歳？ このシマケンが？ ということはコイツらまだ高校生かよっ。もう驚かないと思っていた俺が流石にこれには愕然とした。

「じゃあデルさん、また夏にステージで会えるといいですね」

「は？ ステージ？」

「頑張りましょう！」

「あ、うん……。頑張ろうな」

メンバーが次々と俺に握手を求めては、薫にもきちんと頭を下げて楽屋へと帰って行った。演^やつてる音楽は大嫌いだ、最後まで憎めない奴らだ。ともかく、想像も出来ない事がこの数時間で駆け巡り、俺は頭の中を整理することで精いっぱい。彼らが去った後は暫く力が抜け落ちた俺だった。

「ライブどうだったケタロー？」

ライブハウスから帰る車の中、まだ頭の中が混乱している俺をよそに、薫は何だか楽しそうに問いかけてくる。まず山ほど質問したのはこっちの方だ。

「そもそも薫は何者なんだ。ライブハウスはほぼ顔パス、演者には慕われ、おまけにこの車は明らかにレンタカーでは無い。あまつさえ今日の俺の宿代まで出すとか言い出したくらいだ。どうやら金にも全く不自由していないらしい。とにかく薫の今の状況を聞いてお

きたかった。

「それよりさあお前……」

「ちよつとはスッキリした？」

「は？」

「今朝聞いた話だと、ケタローって暫く音楽から遠ざかってったみたいだからさ」

「……ああ、確かにな」

「良かった。ライブ誘って正解だったね」

「まあ、多少は気晴らしに……。ってか、そんな事でわざわざ俺を誘ったのかよ」

「そうだよ？ 何か問題ある？」

あっけらかんとした顔で薫はクスクスと笑う。何だ、バカにしゃがつて。そりやお前の言うとおり確かに音楽から遠ざかっていた。星占いの責任にして逃げていた。一応、沖縄^{沖縄}までギターは持って来たけど、バンド解散以来暫く担いでなかったさ。ああそうさ！

「やっぱり音楽って良いよね。嫌なことも忘れられるし」

「ん……。まあ、な」

とは言ったものの、好きでもない、むしろ嫌いなタイプのバンド

の音を聴いてスツキリするわけねーだろ。あんなのにキヤーキヤー言う奴も、もつと他に聴くモンあるだろ。そうさ、俺がああステージに立ってたらもつとこうガンガンに本物のロックって奴を……。

「……！」

「どうしたの？」

「……何でもない」

認めたくなかったけど、確実に俺の中で変化が起きていた。アイツらのライブと、それに熱狂するファンが焼き付いている。俺だって少し前まではああやってステージで自分を表現していた。数じゃ劣るけど手拍子してくれる客だって……。何より応援してくれてる女の子だっているんだ。すると再びあのライブハウスで感じた悔しささがこみあげてくる。

「あーあ、何やってんだ。俺」

確実に聞こえているはずのその大きな独り言に、ハンドルを握る薫は何も言わずに前を向いている。俺は結局薫に踊らされているのかもしれない。でも、やっぱりコイツには敵わないようだ。出会った三年前からずっと。

暫くしてホテル前のロータリーに着いた。よもや、このホテルにもう一泊する事になるとはなあ。すると、車から降りた俺に薫が運転席側から身を乗り出し話しかけてきた。

「ごめん、ケタロー。私これから仕事あるから」

「仕事？　こんな時間からかよ」

「打ち合わせしなきゃいけないからさ。今日はここでバイバイね」

「ちょ、お前イベント会社に就職したんだよな？」

「そうだよ。ま、詳しくはまた機会あったら今度ゆつくりね……。あ、そうだ」

すると薫はバッグから名刺を差し出した。俺は月明かりに照らされたその名刺に目を通す。

「……株式会社NOW、企画部主任、和泉薫……。しゅ、主任？」

おいおい、わずか三年でどんだけ出世してんだよ。そりやまあ薫は頭もキレルし、行動力あるし、それなりに美人でもあるけどさ……。あ、美人はあんま関係ねえか。

「ごめんね。明日も見送りは出来ないと思うけど、気を付けて帰ってね」

「オカンかつ。人をガキみたいに言いやがって」

「そ、ならいいけど。その意気その意気」

「チッ、じゃーな」

「バイバイ」

助手席のウィンドウが閉まるのを見届けると俺は軽く手を振った。

が、再びそのウィンドウが下がり始める。

「……？ 何だよ。忘れ物でもした？」

「好きな子の傍で音楽続けたいっていうの、私は嫌いじゃないけどね」

「はあ？」

「行つてきなよ札幌。それで元気になつて音楽続けられるなら。ケタローのギターなら場所なんて関係ないよ」

「お前、何言つてんだ？」

「だから……、札幌行けよバーカ！ 大バカ！ アホツ！ ドアホツ！」

まあその顔に似合わない暴言を吐き捨てたかと思いきや、フルスロットルでロータリーから国道へと疾走していく車。俺は何にも言い返すことも出来なかった。それが、あの夜のアイツとダブって見えた。

何で、三年前に会つちまつたんだろうな。今の俺なら、それもこれも受け止められたのにな。それは、やっぱり少し肌寒い沖縄の夜の事だった。

- 12 - TOO FAST TO DOWN

ホテルの部屋に入るとそのままベッドの上にどつかと大の字になった。まだ耳の裏でキンキンと音が弾けている。あのライヴハウス、音響エグ過ぎだろ。

「黒南風かぁ」

ふと、妙な寂しさがこみあげてくる。俺にとってあのライヴは、とてつもないインパクトを残していた事に改めて気づかされた。せめてもう少し薫と話でもして、このどうしようもないもどかしさを抑え込みたかった。

すると、タイミングよく鳴る携帯電話。俺は今朝の再来に胸を躍らせ、勢いよく飛び起きて待ち受け画面を確認する。たが、その発信元の名前を見た瞬間、あっさりとその淡き期待はぶち壊された。

電話の主はあの解散の日以来、メールすらしてなかったマッチョだった。ああ、そういや一度だけ俺の脳裏でタンバリン叩いて登場したっけ。コイツ、なかなか要点を突いて登場しやがる。ただ、この寂しさを紛らわすために、誰でも良いから話したかったことに変わりは無かった。

「オイツスー」

「オイツスーじゃねーよ。お前どこで何してんだよ」

「んー、沖縄でヤンダラ中」

「沖縄？ マジかよっ？」

「マジソヨ」

「意味わかんねーし」

この沖縄に来ることすら何も告げずに家を出てきた俺。ここに来てから三日目。親からの電話をことごとく拒否ってたせいで、心配になったオカンがマツチヨの所に電話を掛けたいらしい。とりあえず俺は「一人旅で沖縄に来ている」とだけマツチヨに伝えることにした。

「——ま、そういうワケだから、明日にもそっち帰るし心配すんなって」

「分かった。でもな、家には早めに電話してやれよ。お前の母さんかなり心配してたぞ」

「わーった、わーった。そうだ、そんな事より、あの後そっちどうよ」

「どうよって？」

「いや、ほら、ドラム叩けなくてストレス溜まってんじゃねーかなって」

「おう。だからこの間、新しいバンド組んだよ」

「……は？」

「前から大学の仲良い連中から誘われてたんだ。で、『解散したなら是非』ってことだな」

「はあ。そっか……」

マツチヨの新しいバンド、その名も『キャプチュード』。意味は捕獲するとか捕まえるってことらしく、一度掴んだ客は手離さない音楽を目指すらしい。つーか、電車でドラムスティック忘れる奴が客を捕まえられるのかつーの。それもバンド解散の一因だったんだぞ。……とは、流石に言えず

「まあ、良かったじゃん、頑張れよ」

「おう、ありがとう。そう言うお前はどんなんだよ？」

「俺は……」

その時、俺は嵐の年末年始をコイツに言うのを躊躇った。

「あ、悪いちょっと用事できた。これで切るわ」

電話を置いて再びベッドに倒れ込んだ。マツチヨに今の状況を打ち明けられなかった理由。きっとマツチヨも俺と同じように、音楽浪人やっているって思いこんでいた。「二人でやり直さねえか」なんて言葉を少しばかり期待した俺が馬鹿だった。

薫も、マツチヨも、さっきのシマケンも。それに店長や理恵ちゃんだって、もうどんどん歩みを進めている。今朝見た空の雲にすら乗れなかった俺は、やっぱり今も浜辺でくすぶっている。

「……何やってんだ。俺」

無意識に俺はベッドから起き上がると、部屋の片隅に横たわっていたそいつを叩き起こす。沖縄までわざわざ連れてきた相棒のギブソン・レスポール。久々にそいつを担いでやると、何だか嬉しそうな音を響かせやがる。

「……酔いつぶれて、……しまいそな」

相棒を担いでからというものの、何だか色んなメロディと、詞が浮かんでは消えていく。そうだ、俺にはまだコイツがあるんだよ。コイツに乗せて俺は今の俺を表現出来るんだよ。それが俺のロックじゃないか。

その夜、俺は久々にギターを弾いた。色んなことを背負い込んだその想いの中で、思いつくままに歌い、奏でてみたのだった。気づけば、相棒を横に爆睡した俺だった。

——翌日——

俺は空港にやって来た。すでに心の準備は整っている。家に帰ってとにかくオカンとオヤジにちゃんと説明して、まずあの町から一歩踏み出す。

「行くぞ。いざ札幌！」

どこかの通信教育のCMみたいだ。でも、これは教育じゃない。ロッカーとしての生きる道なのだ。……と、カッコよく決めてチケットを買おうとしていた時に携帯電話が鳴った。それはどうにも罰

の悪い相手だった。

「……もしもし」

「もしもしっ！ アンタどこに居るの！」

オカンの甲高い声が耳元でつんざいた。俺は適当に話を済ませるつもりでチケットを後回しにし、ロビーの椅子に腰を掛けて話をする。

「……そういうワケだから、今日にも帰るからさ」

「まったく、アンタは何考えてるの！ 仕事もしないでブラブラしてるかと思えば、沖縄ってどういうことなのよ！」

「うん、いや、分かったから話は帰ってから……」

いやいや、この険悪な状態で帰ってからちゃんと話出来るのだから。沖縄からやっとドラ息子が帰って来たかと思いきや、「俺、北海道で独り暮らしするわ」なんて、まさにリアル桃鉄な話が心配性なオカンや、ましてオヤジになんか通じるワケないじゃないか。

このまま家に帰って親と顔つき合わし、この話をするのはかなりヘビーだ……。その時、俺は腹をくくったんだ。

「オカン、ごめん。帰ってから言うつもりだったけど、俺、家を出るわ」

「えっ？」

「あの町に居ても仕事も無いしさ。そのまま家に居たら、多分また迷惑かけるだろうから」

「アンタ、何言ってるの！」

「暫く家に帰らないと思う。……でも、ちゃんと連絡は入れるから。心配しなくて良いから」

そのまま俺は電話を切っちゃった。ダメなんだ。ここでまた家に帰ったら親に甘えそうだった。それに、これ以上失う物なんて無い。もう決めたんだ。

「フーツ。さてと、チケット……の前に」

延泊の代金は薰には払わせなかった。流石にこの俺でもそれだけは自分自身が許せなかった。思わぬ一泊をしたことで財布の中身が閑古鳥だって事に気づいていた俺は、バッグの中の封筒から補充することにした。沖縄（ミナト）に来る前に銀行から引き出した全財産だ。

「……あれ？」

さっきの電話の最中、傍らに置いたはずのショルダーバッグがそこに無い。

「えっ」

辺りを見回しても足下に俺の相棒が横たわっているだけ。

「……嘘だろ」

一気に青ざめた俺が立ち上がりロビーの客を片っ端からチェックする。違う、アイツでもない、アイツも違う。

「……！」

すると今にも空港のエントランスから外に出ようとする客の中に、似たバッグを持っている男が居た。

「ちょっ、お前！」

俺は相棒をその場に残し、猛ダッシュでそいつを追いかけたのだ。
った。

- 13 - オリオンの冤罪

冬にも関わらずかりゆしウェアの茶髪のそいつ。みるからに頭も性格も悪そうなヤンキーだ！ そいつは取り立てて慌てる様子もなく、悠然とエントランスの自動ドアを通り過ぎて行った。瞬間、対象の姿が消える。

マズイ。このまま車にでも乗られたらおしまいだっ！ ぶつちやけ喧嘩になったら勝てるかどうかかんねえヤバそうな相手だ。でも、見過ごすワケにいかねあって！ やってやるって！ 追う俺の頭の中で、刑事モノのテレビドラマのBGMがフィードバック。

「待てえ！」

すれ違うロビーの客を払い猛然と犯人を追う俺は、もたつく自動ドアにやきもきしながらも、ようやく屋外に出る。

「……いたっ！」

そいつはまだエントランス前のタクシー乗り場に突っ立っていた。俺は猛ダッシュでそいつの背後に立ち、おもむろにそいつの肩を引き問いただした。

「おいっ。それ、俺の……」

——バッグじゃ無かった。

「ああ？ なんだテメエ」

「あ……いや、すみません」

その男はめちゃくちゃ機嫌悪そうにこちらを睨みつけると、次の瞬間「テメエ、コラ」と胸ぐらを掴まれた。俺は何度も何度も平謝りを繰り返す。しかし、茶髪男の沸点は非常に低い。まさに瞬間湯沸かし器だ。コイツは簡単には許してくれそうもない。俺はいつものクセでボソツと呟く。

「……んだよ、何もマジで刑事モンっぽいベタなオチじゃなくてもいいじゃねーか」

「何だ？ 何ブツブツ言ってたんだコラア」

「あつ、いや、俺お得意の大きな独り言で……」

「へえ、なるほどなあ……。オマエ、ナメてんのかコラア！」

俺の胸元を締め上げて何度も揺さぶる茶髪男。頭がフラフラと揺れる中、俺は「アハ……アハ……」と瞼をへの字にしてヘラヘラ笑うしかない状況。と、その時だ、ふと視界にそれが目に入る。

「……あーっ！」

空港の自動ドアから出てきたスーツ姿の男。そいつが肩から掛けているそれは、まさに俺のショルダーバッグ。確証は無い。しかし、何よりコイツよりあっちの方が喧嘩になっても勝てそうだ。

「おいっ！ 待てよお前！」

俺の一声に驚いたスーツの男は慌てて駆けだした。やっぱりそう

だ、アイツが真犯人だ！

だが俺の今置かれている状況はそれどころではない。

「……お前さ、マジで殺されたいのかコラ」

目の前の茶髪でガラの悪い、いかにも犯人的だが実は冤罪だった男が勘違いする。「お前がそんな風貌だからこっちも勘違いしたんだよっ」とはもちろん言えず。

「いや、あんたじゃなくって、アイツなんだよアイツ！」

「おう、良く分かったよ。つまり……殺されてえんだなオラア！」

「だから誤解だつてえ！ わかんねー奴だなあ！ もう！」

俺は思いっきり足に力を入れ、茶髪冤罪男の股間を蹴り上げた。

「ウツ……」

トップロープに股間をしたたかに打ち付けた、往年のジャンボ鶴田よろしく、その場でゴロゴロと転がり悶絶する茶髪冤罪男。「ホントに悪い！ ゴメン！」とだけ言い残し、俺は逃げたスーツ男を追いかける。

「クソつたれえー」

街中を逃げるスーツ男の背中を追う。俺とそいつとの距離がみるみる狭まっていく。その時の俺はまさに怒りの疾風となって犯人を追うスプリンターと化していた。

そうなのだ。何を隠そう俺は中学の頃は帰宅部で、昼飯を食うのが早かった。だから足はそれほど速くない。だが、そのスーツ野郎は俺よりもっと鈍足だったのだ。

「はあ、はあ……。さあ、返せよデメエ」

ついにそいつを路地裏に追い詰めた。なかなか手こずらせやがったスーツ野郎だったが、いよいよ観念したのか肩からバッグを下ろし手に取ると俺に向けて差し出した。

「はあ、くつそ。手こずらせやがって……」

俺がそのバッグに手を掛けた瞬間だ。そいつはあるうことかバッグを勢いよく振り上げ、思い切り俺の頭を殴りやがった。

「ガッ！ 痛って！」

ガクツと力を無くしその場に跪く俺。この脳天を突き刺す鈍い感触。間違いない。さつき親の為に土産で買ったオリオンビールの瓶だ。何でそんなもんバッグに入れとくんだ俺！

「くつそ！ お前え」

頭を抱えて苦しむ俺に、そいつはさらにバッグごと俺の身体めがけて投げ捨て、再び街中へと走り去っていく。

「……チツ。痛ってー。何なんだよこの……オリオンビール！」

俺はフラフラになりながらもバッグを開く。取り出したオリオン

ビールにコンコンと説教を繰り返しつつ、肝心のその封筒を探した。

しかし、悪い予感は的中した。見事に封筒だけ無くなってやがった。もちろん、着替えのパンツだってそのままだ。ま、そりゃそうか。封筒とそれだけ無くなってたらある意味気味が悪いって。

「ああ……、何なんだよもお！」

俺はガックリと肩を落とし、その場にへたり込んだのだった。

——それから数分後、空港に戻った俺。何よりも置きっぱなしのギターが気がかりだった。

茶髪冤罪男がすでに居ない事を遠目で確認し、足早に空港のロビーに入る。果たしてそれは俺にとって本当にわずかな光明だった。さつき座っていた椅子の前、ご主人の帰りを待つかのように、『相棒』がじつと居座っているじゃないか。

「良かった。コイツだけでも盗まれなくて……。って、いやいや、そんな悠長な事言ってるんねーか」

シーズンオフにも関わらず、そこそこ観光客が行き交う空港ロビー。その殆ど人が晴れやかな表情を浮かべる中、曇った顔の俺はその椅子に再び腰を下ろすと、ため息を漏らすのだった。

- 14 - フォローのかほり

「——アンタ……。ホントに大馬鹿だね」

「何とでも言え。今は何の反論もできねえ」

「やーいバーカ、バーカ」

ムカついたけど、やっぱり当たっているだけに、何も言い返せない俺が居た。

国際通りのレストラン。とりあえず沖縄に来てまだ食べてなかったソーキそばにがつく俺。濃厚な味付けの角煮入りに舌鼓。その目の前で薫は散々嫌味を繰り返す。でも、その瞳は何だか妙に嬉しそうに感じた。

「何だよ。俺の見事なまでの不幸スパイラルがそんなに楽しいか」

「別に……」

「……。何だその『カオリ様』的な返事」

「別にいい」

「ムカつく」

バッグを巡る壮絶なドタバタ劇の後、俺がロビーでどんより曇り空を展開している中、薫から電話があった。^{「ハイ」}この沖縄で頼れる人間は薫しか居なかった俺は、赤っ恥覚悟で状況を打ち明けると、仕事

の最中にも関わらず駆けつけてくれたんだった。

その後、警察で被害届を出し終えた俺たちは、昼食を兼ねてこのレストランに来ていた。

「今時国内旅行で置き引きに遭う日本人なんてケタローくらいだよ」

「はいはい、そうですね」

「昨日『オカンみたいに言うな』って偉そうに言ってたクセに」

「そうですね」

「……今日はいいい天気だね」

「そうですね」

「なんと、明日は沖縄なのに大雪らしいですよ！」

「……あーそうですね」

「おっ、多少は余裕あんじゃん」

「うるせ」

すると薫は自分のバッグから財布を取り出した。真っ赤なちよつとゴツツイ恐らくブランド物の財布だ。この分厚さ……一体幾ら持ってたんだ……。対して俺の財布はコンビニのレシートで嵩張って分厚いってーのに。嫌味な奴だぜ！

「とりあえず、これは貸しだからね。ちゃんと返せよ」

テーブルの上に数枚の諭吉を差し出す薫。俺は咄嗟にそれを突き返す。

「ざけんな、要らねエよ」

「そんな見栄張ってる場合じゃないっしょ。とりあえず家に帰らなきゃ。それとも沖縄で仕事探して暮らすつもり？」

「おー、それもいいかもな。頼りになるお前も居るワケだし」

「……あれ？ 言ってなかったっけ？」

「何を？」

「私、別にここで暮らしてるワケじゃないよ。今も私は東京在住ですよー」

そう言つと薫はストローをチューチュー鳴らし、トロピカルドリンクを飲む。

「マジか。じゃあ何でお前こんなトコに……」

「だから、仕事だって言ってるじゃん」

「……あの、イベント会社のか？」

「そだよ」

「そうなのか……」

「恐れ入った？」

「ははーっ、カオリ様……ってアホか」

店を出ると今日も嫌味なほどに快晴な沖縄の空。薫は「せっかくだし、海にでも行く？」と聞いてきた。当然、財布の中が風邪をひいている俺にとって選択肢は限られていたわけで。それよりも、仕事中にも関わらず、そうやって俺を気遣う薫に感謝の気持ちでいっぱいだった。もちろん、そんな事口が裂けても言えねえけどさ。

那覇市内から数十分。国道を北にひた走り訪れたとあるビーチ。そういえば薫と付き合っていた頃、二人で海に行った事すら無かったつけ。まあ、たった三か月の恋人関係だったから無理も無いか。

海をボケーッと眺めていると、さっきまでの高揚もようやく落ち着いてきた。すると自然と俺はそれを話していた。

「なんかさあ……。ここまで落ちたら妙にスッキリした。余計な事考えずに音楽やれそうだ」

「……じゃあ、やっぱ決心したんだ？ 札幌行き」

「ん……。いや、そのつもりだったけど、無職どころか、金もゼロになったんだぜ。身寄りの無い札幌なんて、俺には荷が重すぎるよ」

「ゼロって、本当にお金全部盗られたの？」

「ああ、ぜーんぶ引き出したからなあ。この三年間バイトで貯めた金」

「……つくづく、バカだねえ」

「あーそうだよ」

「じゃあさ。……理恵ちゃんも諦めるんだ？」

「諦めるっていうか……。うーん、何て言えばいいのか」

「そこは違うんだ……。ホント、バカだね」

そうだよ。俺はバカだ。でも、だから余計にスッキリした。今の俺は好きな女とか以前に、それもひっくるめて純粹に音楽に打ち込めそうだって気づけたんだ。

「俺さ、さっきオカンに『家には当分帰らない』って言ったんだよな」

「ふーん。じゃあ本気で家を出る気なんだ」

「まあ、な」

「へえ……。ちょっとは見直したかな」

「また上からかよ」

「そっじゃなくて……。でもさ、札幌は諦めたんでしょ？」

「ああ、だけど俺にはもう一つ……。いや、本当は最初からそれし
が無かったのかもしれないけど、まだ選択肢が残されてたんだ」

「もう一つ？ あ、それってひょっとして」

流石に勘の鋭い薫だ。昨日俺が打ち明けた一連の年末年始の出来
事からピンときたらしい。そうだ、俺に残されたもう一つを選択肢。
それは……。

「行つてやるぜ！ TOKYO！」

俺は立ち上がると思いつきり天高く拳をかち上げた。うむ、久々
にロツカーらしく決まったぜ。

「ていーけー……おー？ ノックアウト？ あ、お笑い芸人の方？」

「……。『東京』だつっーの」

「だつたらちゃんと初めから『東京』って言いなよ。面倒くさい」

「め……。うるせーな。ここまでマジで惨めで酷かったんだから、
ちよつとくらいカツコつけさせてくれても良いだろ」

「はいはい。じゃあさ、その東京に行くお金はあるのかな？」

「オフツ。そこを突いてくるか」

確かにコイツの言う通り。俺の財布にはその東京に向かう飛行機
代すら残って無い。そりゃその程度のコくらい、手軽に借りられる
カードローンも何とか探せばありそうだけど……。だが、ロツカー

が無人契約機を前に、タッチパネルにチマチマと金額打っている姿なんて想像したくもねえ。

すると、薫がニヤニヤと含みを持たせてから俺に呟いた。

「じゃあお金くらいは貸してあげる。その代り、利息として私の寄り道に付き合ってくれる？」

「寄り道？」

「嫌なら沖縄^{「コ」}で独り頑張って生きてください」

「いやっ、無理っす！ 寄り道でも寄せ鍋でもついて行きます。力オリ様」

「よろしい。じゃあ早速今晚、ライブに出演してもらってからそのつもりで」

「はあ？ 出演？ 今晚？」

音楽を取り戻した俺に、沖縄のそれは急激な追い風となって吹き始めたのだった。

その日の夕方、俺は昨夜と同じライブハウスの楽屋でギターのチューニングをしていた。エライ事になっちまった。薫に言われるがままここに来たけど、まさかいきなりステージに立つ事になるとはな。

「あ、デルさん！　こんばんは」

「……よおっ」

やってきたのは昨日俺が散々ボロクソに言ったバンド、『黒南風』のリーダーシマケンとそのメンバー達だ。そうだ。俺は今晚、黒南風のステージに立つ事を薫から命じられたんだ。

「今日はよろしくお願いします」

「いや。ってか、俺もまさかこんな話になるなんて思ってなかったんだ」

「えっ？　そうなんですか？」

「何だ？　シマケンも知らなかったのかよ」

「はい。さっき和泉さんから聞かされた時はメンバー全員ビックリしましたよ」

……薫の奴、何企んでやがる。今日のステージは対バンライブなんかじゃねえ。『黒南風』の単独ライブなんだぞ。そこに全くの部

外者の俺をねじ込むなんて。

「あのさ、迷惑だろ？ 俺、薫に言ってやっぱ出るのは辞めるよ」

「いやいや、迷惑なんて。僕たちも最初は驚いたけど、今は凄く楽しみなんですよ。何か、今までと違ったステージになりそうです。なあ？」

「そうそう。デルさん、辞めるなんて言わずよろしくお願いします」

黒南風のメンバーが揃いもそろって嫌な顔一つせず歓迎ムードだ。何というポジティブシンキング。コイツら本当に音楽を楽しんでいる。が。

「……シマケン、それに皆。黒南風ってめっちゃナイスガイな奴の集まりだな」

「ナイスガイ……ですか」

苦笑い浮かべるシマケン。それは謙遜ではなく、どうやら俺の言葉のチョイスが古かったようだ。

「ほよつ、全員集合してるねー」

「和泉さん、お疲れ様です」

「お疲れーつ。……おやつ、そこで偉そうにふんぞり返っているのは、ゲストのデルさんじゃないですか」

「……何い」

「おー怖いゲストさんだあ……。さあ、シマケン。そろそろリハ始めるよ」

「あ、はい」

するとメンバーは手際よく仕度を始める。一度は出演を決めた手前、俺はとりあえず相棒のチューニングを続けるのだった。すると薫はとんでもない事を言い出した。

「デルの出演はアンコールの一発目だからね」

「……はあ？ アンコールだとお？」

「もちろん、彼らには了承済みだから安心して」

「バカ！ 何で部外者の俺が『黒南風』の再登場を心待ちにしてる客の前に、ノコノコ現れなきゃなんねーんだよっ」

「だからこそそのゲストであり、サプライズじゃん」

「お前、根本的に間違ってるっつーの。サプライズっつーのは……」

と、反論する俺の話なんか耳も傾けずに踵を返し、薫は黒南風のメンバーに手を叩きながら号令をだす。

「はい、じゃあ黒南風の皆さん、リハーサルよろしくお願いしまーす」

「よろしくお願いしまーす」

メンバーはゾロゾロと楽屋を後にする。その後について行くことする薫を俺は引き留めた。

「お前、本当に良いのかよ。ここまでお前に付いてきて大体察しはついてるんだ。どうせこのライブはお前の会社が囃んでるんだろ？大事なイベントに関係ない俺を出してお前の立場マジで大丈夫なのかよ」

すると薫はこの沖縄で再会して以来、見せた事のない真剣な顔で俺に言った。

「……私はケタローを信じてるよ」

ふと、その言葉が懐かしくもあった。何時だったっけ……。このセリフ、前にも聞いたことがある。すると薫はニツコリと笑って俺の胸に拳を押し付けると楽屋を出て行った。

——黒南風のライブが始まった。

楽屋の階上にあるPA室からは、ステージと客席が窓越しに伺えることが出来た。音響さんの邪魔にならないように配慮しながら、俺はそのライブの様子を見下ろしていた。

前夜と同様に、いや、むしろ週末の今日は客の数も増えている気がした。その殆どがやっぱり女子中高生だ。一曲目から総立ちで場内のボルテージはガンガン増していく。

「うわぁー……。マジで緊張してきたぞコレ」

これでも人前に立つのは慣れているはずだった。『ローリング・クレイドル』のリードギターとして、場数もそれなりに踏んできた。だが、今日は違う。一人のギタリスト『デル』としてこの客の前に立つ。それも今までと全く異なる客層の前に。

「……………それにしても上手いな」

正直言つと昨夜はステージの黒南風やシマケンの動きは殆ど見てなかった。確かに彼らの音楽は俺の目指す音楽のベクトルとは違う方向を向いている。だが、目の前の客を自分たちのペースに惹き込む術を確実にモノにしている。

ふと、昨夜の嫉妬心が湧き上がってきた。もし、このステージに俺が立つたならもつと……。俺の中で「このままじゃ終われない」と後押しする。

「面白い。……………やってやろうじゃないか」

俺は急いで楽屋に戻るとピックアップケースを取り出した。こいつの中には大事なライブでしか使わない七つのピックが収められている。今日のこのステージと、今の俺のメンタルにおあつらえ向きなそいつ。コードネームC、情熱の真っ赤なヘビーピックを掴むと俺は瞼を閉じた。

イメージ出来るぞ。この後のステージの展開が……。楽屋に寄せては響く観客の熱気と共に。

「ケタロー、準備良い？」

ライブも佳境を迎えた頃、薫が楽屋を訪れた事に、俺はその時すぐには反応出来なかった。それ程にイメージトレーニングに集中していたんだ。

程なくしてステージから引き揚げてきた黒南風の面々が楽屋に戻ってきた。ここまで全力疾走した彼ら。やっぱり皆一様に満ち足りて生き生きした顔してやがる。

そうなんだ。初めてステージに立つテンションではダメなんだ。彼らの作り上げた二時間余りの世界。そのテンションまで俺のメンタルを引き上げて臨まなければ、絶対に彼ら黒南風だけでなく、目の前の客に食われちまう。そんなワケにいかねえ。

「俺が、食ってやる！」

「……？ 何を食べるの？ お腹すいたの？」

まったく、いつもいつも俺がカツコよく決めようとすると邪魔をするのは薫だ。^{「グッ」}

「何でもねえよ」

「そつ。じゃあデルさん、もうすぐ時間ですよ」

「……ん、おう。……チツ、近くに人が居る時はデル名義かよ。ややこしい奴」

するとアンコールブレイクを終え、充電完了したシマケンが俺の所にやって来た。

「デルさん、俺らに遠慮なくお願いします!」

「遠慮なんかしねえぞ! こっちこそ、よろしくな!」

俺とシマケンはガツリと握手した。そして黒南風が先にアンコールの声轟くステージへと歩を進める。俺もその後方から追隨する。すると不意に薫が俺の肩を叩いた。

「ファイツ。ケタロー」

俺は無言でそのエールに応えると、楽屋のドアを引き開けた。その瞬間、ライブハウスの熱気が俺の身体を包み込んだ。

- 16 - 音の交差点

アンコールを受けて黒南風の再登場に、フロアにごった返す観客の盛り上がりも最高潮だ。でも、飲まれるわけにはいかねえ。逆に……食ってやる。

「——ありがとう！ ちょっと聞いて欲しい。今日は皆に紹介したい人が遊びに来てくれているんだ。知る人ぞ知る、孤高のギタリスト。デル！」

……つつたく、誰も知らねエって。なんつー紹介しやがんだ。と、ブツブツこぼしながら、俺はシマケンのアピールを受けて舞台袖からそのステージに赴いた。

「……誰？」

そのステージに立った瞬間、俺の両耳に届く女子達の声。何だかんだ言っても狭いライブハウス。本人は自覚してないだろうけど、無責任なそんな呟きも簡単に聞こえるもんなんだぜ。

それに、ステージに立てば、大体その場の客の雰囲気なんてコンマ数秒で掴める。皆、顔は笑ってるが内心「何だコイツ？」って言うてるのがビシビシ伝わって来るぜ。目は口ほどにモノを言うとはよく言ったもんだ。

本当はここでシマケンと少しトークする段取りだったが、俺は客の雰囲気を受けて咄嗟にシマケンに耳打ちする。

「ダレる。確実にダレるから、もう一気にぶっ放そうぜ」

すると、シマケンも俺の考えが伝わったらしい。「OK」と合図して黒南風のメンバーにアイコンタクトを取る。俺はピックを持つ右腕を振り上げ、瞼を閉じ心でカウントを取る。瞼の裏がやけに明るい。スポットライトが俺に照らされた。俺は勢いよく相棒を掻き鳴らした。

—『20th Century Boy』—

それはロッカーならお馴染、T・rexの名曲だ。そんなに音合わせもしていない即席バンドでも、この手の有名な楽曲なら結構即興でコラボできるもんだ。俺のギターを皮切りに、黒南風の演奏がそれこそ風のように乗ってくる。

ぶっちゃけ、まさかこの黒南風がこんな曲を演奏できるとは思ってなかった。リハーサルで選曲の打ち合わせした時に、俺がちよつと口に出したこの曲に賛同したのが黒南風だった。

この曲は彼らの音楽とは全く異なる性質だった。それが証拠に目の前の女子中高生は手拍子こそしているが、慣れないブリディッシュ・グラムロックに戸惑いを隠せない感じだ。

「さあ、お嬢さんたち。パーティの始まりだぜ」

心でそう叫ぶと俺のギターがうねりをあげる。久々の表舞台に何とも嬉しそうな相棒。次第に俺の鼓動も熱くなってくる。客層なんて関係ない。俺を表現するから付いてきたい奴はついてこい！

演奏を始めて間もなく、俺が驚いたのはシマケンのパフォーマンスだった。この曲に対して見事にフリースタイルを仕掛けてきやが

った。どんな楽曲であろうと自分たちの良さはちゃんと外さない。観客の求めるモノをしっかりと掴んでる。コイツら、やっぱあの薫が目を付けているだけある。

サビに入ると徐々に観客が乗ってくる感覚が俺の身体に漂い始めてきた。イケルぞ。この感覚はステージに立って初めて得られる心地よさだ。何だかんだ言っても、音楽に世代何て関係ないんだよな。

「——21th Century Boy……」

しつかりと歌詞を変えてきやがった。シマケン、何とも憎たらしいアドリブだぜ。まあ、きつと舞台袖の薫は「どこかの不動産屋かつ」とツッコミ入れているだろう。でもな、ライブなんてこういう勢いが大切なんだよ！ そうだ、きつと黒南風「ヘンタウ」のこういう柔軟な姿勢も、ここに居るファンに支持されている要因なんだろうな。

俺のギターとシマケンのマイクパフォーマンスが交錯する。激しいバトルがステージで繰り広げられると、初めは戸惑っていた目の前の女子中高生達が身体を揺らし、拳を突き上げはじめていた。そこは音のスクランブル交差点。拳を振り上げ交わるハーモニー。そうして一気にライブハウスは一体となり、俺と黒南風のわずかな共演は大歓声と共に幕を閉じた。

「デル、ありがとう！ 皆、今日のゲスト、デルさんにもう一度大きな拍手を！」

その瞬間、フロアから湧き上がる拍手のうねりに俺は身震いした。わずか数分前、俺に対して白い目を送っていた客が、今この俺だけに対して拍手を送ってくれている。俺の胸に熱い得体のしれない物がこみあげてきた。それは、『ローリング・クレイドル』としてフ

アーストライヴを演^やりきった後に体感したそれと同じもの。

俺は二度、三度客に向かって手を振り舞台袖に消える。そうして俺自身の復活ライヴは幕を閉じた。

結局、一度もステージで声を出さなかった。実際、それは俺自身への挑戦だったんだ。本当にギターだけで勝負できるのかって問いかけへの。……そして俺は勝った。それどころか大きな武器を手にした。自信という大きな武器を。

「ケタローお疲れさま」

楽屋に舞い戻ると何だか妙に笑顔を振りまいてくる薫。ムズ痒い変な感じだが、もちろん、そこはロツカーとして平然を装う。

「おうつ。お疲れっ」

「あれ？ ひょっとして、自信ついちゃった？」

「はあ？」

「甘いよ。今日は『黒南風』におんぶに抱っこだったただけだもんね」

「……お前ねえ」

コイツ、俺を持ち上げたいのか、叩き落としたいのかどっちなんだよ……。その時はまだそんな風にしか思えなかった。きっとそれは薫なりのコントロール。これから起こるハードルを俺が越えられるための。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1665w/>

ロクンローライフ

2011年11月1日10時18分発行